020　縄文人　030321

譽田亜希子著＜知られざる縄文ライフ＞

◎図版たっぷりの小学生向けの本なのかな。縄文人とひと口にいうけれど、1万年間、気の遠くなる長いあいだ、日本各地に暮らしていた人々、我々の先祖でもある彼らの話。とはいえ、その人口は千人単位かな。出土した数少ない資料の断片、石や土器の破片しかない。素人目には、刃物に使った石なのか、ただの石ころなのかわからない。そういうわけで、著者の先生という言い方は堅いが、彼女が言うように、学者先生連も言うように、わからないだらけだが、想像してみるのも面白い。縄文人の生活を再現して、楽しい絵を添えた本だ。

◎縄文時代は、およそ12000年前～2000年前。

◎土偶展を見たのは、何年か前、滋賀県のミホ美術館に行った。これは圧巻だった、たぶん全国からすごい数の土偶を集め、しかも一級品が多かったように思う。現在土偶で国宝は数点あるとか。一番最初、もう20年も前かな、信州の山の帰りに寄った博物館、尖石で発掘されたビーナスを見た。「日本にも　すごいものがあるねえ」と感動して見ていたのを覚えている。素焼き、赤く焼いた土偶、裸の女の姿、これを竪穴住居に飾っていたのかな。葉っぱや布切れで服を作っていたのかな、日々お供え物をささげていたのかな。

◎土偶はほとんどが、胸には乳、腹が膨らみ子どもを宿している姿、下半身は女性器を思わせる細工がしてある。国宝の指定されているものは、縄文中期が多い。

◎土偶が何の目的で造られたのか、だれが造ったのか、なんのためのものなのか、答えは出ていない。古文書のない時代、文字のない時代、何もかもが想像するしかないのだ。

◎土偶たち、火焔模様の土器、動物の顔形がついた土器、これらはすごい。土器に模様を考え、顔をつけ、これはダレの顔だ、グニュグニュの模様、意外と整ったデザイン、造った大昔の彼らの感性に驚かされる。写実な形を造ろうと思えば造れたはずなのに、おおいにデフォルメされた土偶の人体。土器は、煮炊きに適した普通のヤツもあるが、生活用具としては使いにくい、模様やでっぱりや凸凹、にぎにぎしい土器がたくさんある。

◎居：面白いことに、土偶をヒントに当時の服装、化粧、入れ墨を想像したイラストがある。植物繊維で織った布の断片が出土している。防寒には、布の衣の上に動物の毛皮を纏っていたのではと想像される。靴はわからないが、アイヌの人たちはサケの皮で靴を作っていた。ヘヤースタイルは、男女とも長髪をぐるぐる巻いた土偶風かな。顔や身体には、世界の原住民のような。入れ墨やペインチングがあったのでは。

◎食：動物の狩猟が日々できるわけでもない。魚介類も日々獲れるわけでもない。どんぐり、栃の実などは、うまく灰汁抜きして、日々喰っていたのかな。栗、クルミ、山菜も食べていた。有名な縄文クッキーもある。
クルミ670ｋカロリー/100g　栗や栃165ｋ　イノシシ肉300ｋ　　アサリやシジミ50ｋ

◎住：穴を掘って平らにし、円錐に柱を立て、草や茅を葺いていたのかな。こういう竪穴式住居の再現物はあちこちで何度も見ている。ワンルームの大所帯で、愛の営みはどうしたのかな、なんておせっかいな話が出てくるが、そんなもん、かってに想像しましょう。

◎トイレ事情：糞石とは“うんこ”が化石化したものが発見されることもあるが、排泄物は姿が残りにくい。貝塚の中に糞石が発見されることがあるが。ヒトのものやら、犬のものやら、わからないらしい。

◎黒曜石、ヒスイ、サヌカイト、アスファルト、琥珀などは、数百キロ、千キロも離れたところに運ばれている。行商人がいたのか。背に担いで何日も歩いたのか。丸太船で海を渡ったのか。

◎ストーンサークル：環状列石：有名なイギリスのストーンヘイジは4000年前に作られた。日本のものは、6000年前ぐらいから、178箇所あり4割が秋田県にある。日時計・墓・祭祀の場・・謎に満ちている。

◎縄文人で　もうひとつ感動したのは、赤い漆の塗装品。木に赤い色を塗った写真を見たことがある。

◎ところで、永遠の謎、想像するしか解決しないのが言葉だ。いつもおしゃべりをしていたのかな。おれやおまえ、好きだ嫌いだ、行こう帰ろう、あれが欲しい、これをあげる、おまえはばかかあ・・・。

021　上野千鶴子 2　040321

◎オリンピック組織委員会、正式名称はこうだったのかと、オリンピックに興味のないオレは、あらためてネットで調べ、「へええ」とうなずいている。話の最初からつまづき気味だ、そおりい。その会長を森元総理がつとめていた。内容が正確ではないと思うが、「女性がたくさん出席している会議は　時間がかかる」と発言した。今 80 歳代の彼、男社会でもまれてきたじじいが、てんやわんやの組織のトップをつとめ、まもなく最終コーナーというところで、「女性差別」「オリンピック精神にふさわしくない」とごうごうの非難を浴びて辞任した。実際、このジジイが、わがまま、傲岸なのかどうかは知らない。TV で元東京都知事が、彼を擁護していた。「総理をつとめたような彼が　あちこちに頭を下げ　根回しに走り回り　国内外をうまくまとめてきた　これは彼でないとできなかった・・」

◎上野先生が若かりし頃の日本はまだまだ男社会だったと思う。衣川さんから、この事に関してのメールが来た。長いので略して。

◎今はあまり彼女の主張される言葉に共感は持てません。男女平等、最近の英語の言葉ではジェンダーというのかどうかしりませんが・・。最近のこの風潮は嫌いなんです。というのは、生物学的にハッキリ男女の違いがあり、生理的にはもちろんのこと性格的にも違いがあります。その違いを無視した男女平等は、反対に不都合なことを生み出します。男女の遺伝子的な違いは明らかで、それは理性の発達したヒトでも無視できません。

　男女差別で言えば、意味のない男女差別はもちろんありますし、それは止めなければなりませんが、これはおかしいといことが何点かあります、まず第一に女性の社会進出が遅れている、女性も社会で活躍すべきという主張。この主張は育児や家事は価値がなく、家庭の外の社会で働くことや、そこで社会的地位を得ることに価値があるとしている。

　しかしそうでしょうか？くだらない会社で働くより家で赤ちゃんを育てたり、料理をするほうが、ずっと意味のある大切なことだと思う。

◎先日もネットで、若い女性のつぶやきを聞いた。「男女差別　セクハラ　そんなものは　ないよ　男も女もいっしょ・・」反対に、歯ぎしりして悔しがる被害者も多い。

◎上野先生のフェミニズム・ジェンダーの主張は、半世紀たった今や、オレにはいささか奇異に映る。だけれど彼女の思想思考の体幹はすごい、とまずは言っておこう・・なんて。

◎社会学というのは、“今”を論じることが多い。コロナ禍の今、コロナを論じている人、震災の時は、防災を論じていた人、いろいろなので、”はやり“に惑わされないようにと思う。街には、「今日　TV 見たけど・・新聞読んだけど・・」と論じる解説者があふれている。日本は知識人大国だ。ただ思うのは、マスメデアが、誤ったでたらめ報道、自身が主張する一本道、これらも溢れているのは嘆かわしい。

◎衣川さんのメール後半にほっとする。

　ぼく自身は当時としてはよく育児をしました。毎日の風呂、オムツ交換、夜泣きの時、抱いてあやすことはもちろんのこと、暇があればいつも乳母車に載せ、あちこち静かなところを、赤ん坊と２人で散歩していた。

　４才にもなれば、泊まりがけで予定も立てずに夜行列車に乗って子どもと２人で旅に出かけていました。大人１人旅では予約なしで民宿に泊るときに警戒されるのですが、小さい子連れなら好意的に泊めてくれます。満員のときはわざわざ知り合いに電話して宿泊先を紹介してくれます。子どもをだしにしているのですが、それより小さな子どもとの２人旅は楽しい。

　育児に関しては、父親は母親にはどうしてもかなわないことがある。それは、お乳をあげられないこと。これはぼくが育児をしているときに痛感した。泣いていたら、大小便でオムツが汚れているか、お腹が空いているか、退屈したか、その 3 つしかない。オムツを見てどうもない、抱いて外に連れて行ってあやしても泣きやまない。とすると、おっぱいしかない。しかしぼくのおっぱいを吸わしてもなあ～・・。

022　縄文人2　080321

古谷嘉章著＜縄文ルネサンス　現代社会から発見する新しい縄文＞

◎縄文、縄文人、縄文時代、そういうことを大きな視点で書いてある。

◎本の中に、下記四人の縄文専門家の話が載っている。この四人の話、「縄文とは　縄文人とは　縄文時代とは・・」今まで、漠然と、「土偶・土器・一万年の縄文時代」ただたんに過去の話、歴史の話と思っていた。日本にもあったんじゃないのかなと言われている石器時代の次、弥生時代の前、その間の一万年間、そんなふうに考えていた。石器時代と弥生時代そのどちらでもない縄文時代、それは、「生き方」が違っていたのだ。

◎「縄文人は　縄文人の生き方をしていた」これには驚き納得した。石器時代人は、放浪の民、狩猟採集の民だった。ゴリらやチンパンジーなどの霊長類は、日々、動き回り、同じベッドに寝ることなく、毎晩の塒を探すという生活だよね。石器時代人は、塒やベッドは無かったのか？雨宿りや集会場所は無かったのか？このあたりのことは知らないが、縄文人は定住していたらしい。

◎縄文人は定住して、家らしきものを作り、そこを拠点に狩猟採集をしたらしい。弥生人のように田んぼを作って稲作に、村を作って組織を作って、というのではないらしい。

◎呪術・精霊と交わる生活。上下関係のない集団生活。遠い所との交易生活。しかも一万年。

◎小林達雄：縄文人は定住して、ムラを作った。ムラを取り囲むハラを利用しつつ営んだ生活スタイルが、縄文姿勢方針、つまり、自然界の多種多様なものを利用することによって、生活の安定を確保する。それが一万年に及ぶ安定した生活を可能にした。移動して狩猟採集する旧石器時代人とも違う、定住して水稲栽培をする弥生人とも違う。

◎土偶は、ナニモノカ：精霊の表象である。土偶はあらかじめ壊すことを前提に、チョコのように作っている。

◎生活に必要な道具、槍とか弓とかの道具は世界各地の石器人も持っていた。土偶は日本列島独自のもの、近隣の中国、台湾、朝鮮、沿海州、樺太などにも見当たらない。日本列島の個性、ユニークさを物語る。

◎著者の先生が、“呼び捨て”で書いてあるので、若い奴かなと思ったら、なんとオレより十歳上のりっぱな人のようだ。次回この“おっさん”の本を探してみるべ。

◎岡村道雄は、縄文時代には、私たちの祖先が各地の自然環境にあわせて築いた安定した社会が一万年以上も維持されていたとし、それをユートピアと呼ぶ。なんとその「縄文的生活文化」は、昭和30年代から高度経済成長、列島改造まで色濃く保たれていた」という。＜オレ、これ、ちょっと、首をひねる・・＞

◎「縄文的生活文化」は、里山・里海という人が手入れして利用し続ける生態系、各地の特色ある地域文化が他地域との物資の交換を行いつつ継続していた、「縄文ユートピア論」という。＜これはいいね、とオレ＞

◎岡村道雄：縄文石器時代の学者。20年ぐらい前の捏造事件、岡村先生は専門学者として捏造者と同じ遺跡の穴を掘った仲らしい。捏造の犯人は神の手を持つ考古学愛好家。「なんで　みんなが　多くの専門家まで　権威ある学者まで　騙されたのだ　教科書まで書き換えて・・」＜不思議がるオレ＞

◎瀬川拓郎：北海道の縄文人は、弥生化を受け入れ農民になる道ではなく、縄文伝統の上に立って交易のための狩猟に特化していく道を選択した。アイヌが、最後まで守ってきた縄文思想、「私たちの　原郷の思想　とはなんだったのか」を考えたい。アイヌだけでなく、本州の、海の民、山の民もしかり。縄文の思想は、自然と共存し、動物と濃密な関係を持ち、移動性に富み、呪力や霊力を司り、贈与の関係に執着し、自由、自治、平和、平等を重視する思想。

◎大島直行：縄文人の、「再生の思想」を説く。土器、土偶、石器、竪穴式住居、墓穴、貝塚、サークルストーンすべてが再生のシンボルであり。月の水を蛇が子宮にもたらし、再生が実現するという思想表現をしている。

023　縄文人3　130321

小林達雄著＜縄文文化が日本人の未来を拓く＞

◎早速、縄文の権威と言われる先生の本を借りてきた。なんだか、たいそうな題名が付けられている。「縄文の専門家だから　自分の専門分野が一番だ　一番いいのだ　というのは　わかるが・・」なんて皮肉を言いながら読み始めた。先生、「下記の3点は　教科書で　多くの方が習ったこと」とはじまる。

◎旧石器文化：10万年より以前に、ホモサピエンスがあらわれた。当時、動物と同じように自然の中で、食料を求めて遊動的な生活をしていた。

◎新石器文化：1万年ぐらい前から、農耕・牧畜が開始された。メソポタミヤ・インド・ペルー・エジプト・中国。マヤ・アンデスは5000年ぐらい前。

◎日本では、3万年以上前から、石器時代人がいた。マンモス・ナウマンゾウ・オオツノジカ。バイソンが棲んでいた。

◎縄文時代：世界より5000年早く定住生活が始まった。1.5万年前から縄文時代が始まり、土器が制作された。

◎土器の製作と使用がなぜ画期的なことなのか。それは、旧石器人の遊動生活から、定住生活に移行した証明になるから。

◎土器を作るためには、材料の土、土の加工、乾燥のための時間、焼くための窯、燃料の材木調達、これらの作業は定住でないとできない。

◎世界は、ムラを作ってノラに向かった。縄文人はムラを作ってハラに向かった。ムラ・・ハラという言葉は先生の造語なのか、いずれにしてもゴロがよく説明しやすい、覚えやすい。ムラ・ノラ・を翻訳すると、世界では人が定住をはじめ、村（ムラ）を作って農耕面積を広げ牧畜をし、野良（ノラ）仕事に精を出した。日本では定住が始まり、濃厚には進まずまわりの原っぱ（ハラ）、海や山で、狩猟採集生活を始めた。

◎世界のほうがすごい、縄文時代より文化文明が発達するほうがすごい。世界では、村の中で農耕、牧畜が始まり、文明が開化していった。世界四大文明なんて教科書で習った。君主が、貴族が、都が、城郭が、軍隊が、文字が、建造物が、料理が・・。

◎著者の先生の主張。世界四大文明がすごいのか、日本の縄文人の生き方がすごいのか、先生は日本の縄文に軍配を上げている。オレもこれらの話を読み聞きして、「縄文の　素晴らしさがほんわか　なにせ　縄文時代が一万年も続いたのだから・・」昔のオレなら、「あたりまえだ　文化文明あっての　ヒトだ」と即答していたが、「自然の中　ふらりふらりと　1万年の　縄文時代」これを聞いて、はっとさせられる。

◎ちょっと考えた、価値観のことを思ってみた。「裏日本は　そらあ　うらっかわだ」「副社長は　そらあ　社長には勝てない」価値観というものが当然のように、かつてのオレには居座っていた。

◎オレは今、裏日本とは呼ばない、日本海側と呼んでいる。山に登るようになって、福井・石川・富山方面によく行くようになった。かつて、新潟県が人口の一番大きなところだった。日本海側は海路の動脈があって、いくつかの港町がおおいに栄えていた。今は鄙びた街に入ると、風格のある風景、上品なシナが目につく。「今は鄙びている　そんなことは　どうでもいいよ　この街は素晴らしいのだ」いつもいつも雨が降って、雪が降って、人口の少ない地方という考え方は吹っ飛んだ。

◎生涯現役という言葉があるように、同じ仕事が生涯続けられることは、ひとりの人の人生にとって、最高に幸福なことではないのかな、と思うようになった。「そらあ　なんかの　オサになってみろ　えらそうに采配は振れるけど　地位と金と名誉は　降ってくるけど　歳になれば　晩年は定年だ」

◎「一流・A級・有名」この言葉は重いね、重いけれど・・。売れないえかきのオレにとっては、いやな言葉だ、と受け取るが、ま、笑ってやり過ごそう。

024　縄文人 4　　160321
小林達雄著＜縄文文化が日本人の未来を拓く＞
◎先生の話は、巨大石、巨大柱、縄文土器、土偶、そして難関の言葉へと続く。

◎環状列石：イギリスのストーンサークルは 4000 年前に作られた、これは写真で見てもすごい、大きい。日本の環状列石は、6000 年前ころから 187 個所もあり、40%が秋田県にある。
◎　先生はこれらの環状列石は、「もっと本気で調べないと　もっと本気で復元しないと・・」石と山、石と太陽、石と春分・秋分の陽の光、これらと関係があるという。
◎一人二人で運べそうにもない大きな石を、なんキロの距離を運んで並べている。100 年 200 年単位で年月をかけて作られている。これはなんだ、まだまだ解明中。
◎オレはまだ環状列石を見たことがない。写真がいくつか載っているが、写真では実感がわかない、実物を見ないことには感性に響くものがない。実物を見るまで環状列石はお預けだ。
◎縄文記念物は、石だけではなく、巨大柱、大きな土盛りがある。三内丸山遺跡の六本柱は有名だ。先生、「夏至の　日の出に　冬至の　日の入りに　ダイヤモンドフラッシュが見られる　これがモニュメントの　正体です　縄文人の世界観です」

◎縄文土器：縄文土器が制作されだしたのが 1.5 万年前（放射性炭素分析法）。縄文土器の登場は、人類史上における奇跡ともいうべき大事件、日本列島で世界で最初に、土器が発明されたとは考えられない人が多い。縄文土器は日本独自のもの、外国から伝わったものではない。
◎漆器も 9000 年前のものが発掘されている。これも一番古い。
◎土器は、ざっと 6000 年遅れて、メソポタミア、アマゾン流域、ロシア・中国で制作されだした。
◎世界の土器は、生活用具のだった、貯蔵用の器、収納の器。
◎先生はいう。「縄文土器は　物語性がある　メッセージを伝えている」
◎日本の文化文明は、中国や朝鮮から伝わったもの、中国や朝鮮が師匠で、日本は発展途上国だった。オレも含めて、みながそう思っているが、世界の石器時代にあって、日本の縄文時代は特異な先進国だったのかも。

◎土偶：縄文時代初期の土偶は手のひらに収まるぐらいの大きさ。
◎土偶をバラバラに割り、それぞれ違う場所に捨てた。イギリスの学者、「ギリシャ新石器時代遺跡の　多数の土偶が　バラバラの破片状態で　出土し　ほとんど　接合しない」日本もこれと同じようなことをしている。
◎先生は、「土偶は　ヒトではない」「縄文人は　精霊を　表したかった」「草木みなものをいう　日本的神道思考」アイヌの人たちの間には、蕗の葉の下にコロポックルがいます。南西諸島のガジュマルの木の枝にキジムナがいます。
◎現在、土偶は 25000 点、まだまだ発掘されている。縄文時代の間、ずっと作り続けられた。

◎火焔土器を知ったのは二十歳代のころだと思う。岡本太郎が素晴らしいと大いに吠えていた。その後スペインのガウディの建築物を見て驚いた。土偶を初めて見たのは 40 歳代か、前にも言ったが信州の尖石博物館でみた。以来縄文展、土器展、土偶展をいくつか見た。
◎先日来の本を読んで、「縄文時代とは　そういうことだったのか」とあらためて知った、わかった。
◎環状列石は実物を見ないことには何とも言えない。大きさ、重さ、一番大事な肌で感じる感覚が沸いてこない。
◎縄文土器と土偶に関して、「あの形　あの模様　あの連続」これは縄文人の、「お話」だったのか。ぶつくさ何かをつぶやきながら、粘土をこね、手のひら、指、棒を使って形を作っていく。「だからやねえ　そうそう　オレがよお　おまえの　のう～　おお　かみさま　おげんきでえ」

025　比良１　170321

◎昼下がりの今、一路滋賀県に向かって車を走らせている、湖西線の比良駅に向かっている。三宅さんと合流し、今晩はイン谷口で車中泊、明日、武奈ヶ岳に登る。3 月になると天気が晴れと雨が交互に続き、「あれれ　いやな天気の　展開だ」と日が経ってしまった。

◎「武奈ヶ岳なら　日帰りでいいじゃないの」と言われそうだが、「車中泊も　キャンプも　いいよ」小野割村岳での車中泊に味を占め、ゆっくりのんびり、旅と山を楽しもうというわけである。

◎このコロナ禍、キャンプが流行っているらしい。オレの場合、山の上でテントを張ってうろうろが多かった。山の上は、テント場が決められ、そこ以外では張れない。もっとも非常事態の場合はどこでもいい。料金は 1000 円が多い、水とトイレが提供される。

◎最近流行りのキャンプ場は使ったことがない。車中泊はトイレがあればどこでも寝られたが、最近はちょっとマナーがうるさそうだ。キャンプグッズ、キャンプマナーそんな TV 番組も流行っているらしい。

◎先日、いつもの河原の帰り道で、自転車がパンクした。仕方がないので、15 分ぐらい自転車を押して帰った。後輪を見ると、外側のタイヤがすり減っている、タイヤ交換をしないといけない状態だ。娘が、もう乗らないといった自転車がもう一台ある。それも、後輪のチューブ交換しなければ乗れない。

◎後輪のチューブ交換は前にもやったことがあるが、なかなかに面倒くさい、ちょっとずつの作業で、二三日かかってしまう。ネットでやり方を調べてみるかと、「簡単　交換　Ｉチューブ」と出ている。「なにかいな・・？」

◎I チューブ，よくもまあこんなことを思いついた奴がいるもんだ、あきれるような面白い商品である。両端が閉じられた、棒状のチューブ・・ま、これは言葉で説明がしにくいので疑問符いっぱいの方はネット検索でもしてたもれ。

◎先ほど、ホームセンターに寄ってみると、ネットに出ていたものが売っている、しかもネットより安い。早速ゲットした。家に帰った翌日に、後輪のチューブ交換が簡単にできたことを、今、追記。

◎比良駅が変わっている、2 年前から比べ、道がついている、信号機がある。駅の山側は昔のまま、「80 分以上駐車しないでください　これは　一日中　止めている奴が　多いかな」というところに車を止め、琵琶湖のほうを散策。昔の比良駅前の民家、その間に今風のリッチ、セレブな宿泊施設、飲食店、海水浴、ボート遊び、魚釣り、そんなこんなの人たちが寄ってきそうなお洒落な店が並んでいる。高級外車も並んでいる。

◎イン谷口にやってきた。「さあ　夜は長い　一杯飲もう」キャンピングカー慣れの彼、椅子に机、照明器具に、焚き火用の金物ボックスが並んでいく。デザイナーで料理人の彼、自家製オイルサーデン、漬物、豆類・・でてくる出てくる。「さあ　どんどん　燃え上がるぞ」というわりには葉っぱに火がつかない、小枝も燃えない。雨の多い日が続き、湿っている、うちわであおぎ、まだかまだかとがんばるうちに、やっと炎が出だした。

◎昼間は暑いぐらいだった、久しぶりに窓を開けて走っていた。そんな暖かさが一転し、夜の闇が迫ってくると、風がどんどん冷えてくる、小さい炎ぐらいじゃ温まらない、さむい寒い真っ暗闇だ。

◎昨日、いつもの安威川河原で、トビを見た、「なんで　いるの　めずらしい」と喜んだが、後日談の今日も見た。カラスに追いかけられていたが、一匹だから同じ奴だろうね。京都から滋賀と進むうちに、トビの姿が 3 匹 5 匹と増えだし、全部で 20 羽ぐらいお目にかかったかな。

◎車の中の布団に潜り込んだ。冷え込んできた、2 度 3 度ぐらいかな、足が冷える、ぞくぞく寒い、窓の外は真っ暗、青黒い空、お星さまキラキラというのではなく、青黒い空に針の孔ほどの光が 10 や 20 あるようだ。まだ葉が出ていない樹々のえだ枝の間をぬってかすかな光が見える。昼間の暑さがこいしい。

◎7 時目が覚めた。ああよく寝た。おにぎり、パンを喰った。旨いコーヒーを入れてくれた、ごちそうさん。

◎8：00 歩き出した。天気は白い雲が 10%20%ぐらいの青空、あおぞらとはいえ白っぽくかすんでいる。川のそばザーザーの音、砂防ダムが何箇所もある。若い頃に砂防ダムの工事をしていたような記憶があるが、そのための道路も今は半分崩れている。風はないね、まだ歩き始めたばかり、冬用ジャンパーは着込んでいる。

026　比良2　180321

◎2時間足らずで金くそ峠にやってきた、風が冷たい、空は相変わらず白い雲がまばら。地蔵さんがある。そういや昔ここにトイレがあったね、登山客が来るもっと昔は、村の人たちの通り道だったかも、“金くそ”というのだから、細々と鉄を作っていたのかも知れない。

◎あれれ、道を間違えたかな、三本あるうちのどこかを歩いている、やたらと渡渉が多い、20回ぐらい右へ左へとんとんと石の上を歩けるところやら、滑るかもと慎重に石を踏むところやら‥。いつも言うように川の傍は滑りやすい、湿っている、こけないように要注意。すってんころりんより、靴が濡れるほうがまだましだ。川の中で転ぶと、頭を打つか、骨が折れるか、水の勢いにのまれるか、くわばらである。

◎お気に入りの樹が多い、堂々としたでっかい樹、ヒノキかな、自然に生えたでっかいヒノキ、曲がって、二又に割れて、ふとい太い。なんでまあ、まっすぐ伸びるヒノキが、こうまで歪んでいるのか、こういう樹々に会えるのは嬉しい限りだねえ。

◎今日は忘れものが多かった。昨夜、寝る前に歯を磨こうとして、歯ブラシがない。ポシェットを整理して、歯ブラシを交換だと取り出した後に、新しいのを入れ忘れたようだ。これは不快だけれど、帰って歯ブラシが楽しみだと思うことで、慰めている。もう一つは山用ジャンパー。ポケットに、毛糸の帽子・ネックウォマー・手袋2枚を入れてザックの横に置いていたのを車に積み忘れたようだ。山は暖かいので今日は、それらは要らないが忘れ物はいけませんぞと自戒。11時頃だけれど樹林帯の風は冷たい、3月中旬だけれど、標高1000Mはまだまだ冬だ。手袋はコッフェルに常備の軍手をはめている。

◎ラジオで、石丸謙二郎の“山カフェ”彼が歩いている音声を先日流していた。風景描写、鳥の声、息を詰まらせながらの話声が聴こえた。「オレと　同じことを　やっているなあ」先輩顔をしているけれど、向こうはNHKのプロ集団、一桁も二桁も大先輩は向こうだ。彼の音声は上等のレコーダー、それに比べオレのレコーダーは安物、靴の音、鈴の音、はーはーぜーぜーの荒い息、そして“ぼやき節”が入る。いちいち紙と鉛筆を取り出してメモは書けない、何かいい方法はないものかと、ICレコーダーをゲットした。今のは4代目かな。

◎樹々には葉っぱがない、幹と枝だけで青空がまる見えだ。もう少しすると若葉が萌え出し、たちまち青葉若葉の季節になる。葉っぱが茂るのもきれいだが、葉っぱが茂ると直射日光が遮られ暑さ対策にはいいのだが、オレは空がまる見え、まわりもよく見える葉のない季節の風景が好きだ。

◎金くそからコヤマノ岳までの道のりが好きな場所だ。なんということのない森の中だけれど、ゆったりなだらかなポコリンの連続の中、静かな時が流れ、ザックザックと歩く。ヒトもあまりここには来ないね。

◎12時過ぎ、武奈ヶ岳山頂にやってきた。4人ぐらいの人があちらこちらで弁当を広げている。空はぼんやりかすんだ青空にいくつかの白い雲。冬用ジャンパーを着込んだままでちょうどいい暖かさ。雪がまだらに、所々に散らばっている。今年は雪山に来れなかった。琵琶湖バレーの斜面はスキー用の白い雪、人工雪だね。

◎比良山系は1000M ぐらいの低い山だけれど、我が家からは来やすいので、よくやってくる、好きなところだ。リフトが無くなってもう長い、人も多くない、静かな山だ。

◎山頂で、のりを巻いた握り飯、お手製のサンドイッチ、おいしくいただいた。

◎歩く速度もだんだん遅くなってきているのだろう、二組の若者に追い抜かれた。

◎思い出せば今日は、まったく花のない山だった。これはめずらしいねえ。

◎3時過ぎ、北比良峠から下り始めた。テントを担いだ二人が登ってきた。ぼちぼち山好きの人が入っている。

◎カモシカ平で小休止。「まだまだ　川の流れの音が　聞こえないな」といぶかりながら下っていると、かすかに川の音、「音が　聞こえてからが　長いんだ」下を見やるとすぐに川が見える。今日は音が上にあがらない日なのか、ますます耳が遠くなってきたのか、川まで降りればあとは車まですぐだ。

◎「賞味期限が　今日まで　という　肉がある」車に帰ってまずは湯を沸かし、靴を履き替え、ラーメンを作り、肉を焼いた。うまい旨いと腹いっぱいだ。最後にコーヒーまでいただいた。

◎昨夜は寒かった。シラフ、毛布と薄い布団、もう少し暖かいほうがいいねえ。

027　縄文人５　　200321

小林達雄著＜縄文文化が日本人の未来を拓く＞

◎いよいよ言葉の話だ。オレは縄文人がこんなふうにつぶやいているんじゃないかなと・・。「だからやねえ　そうそう　オレがよお　おまえの　のう～　おお　かみさま　おげんきでえ」

◎アメリカの言語学者：チョムスキーが、「人間は基本的に　文法をちゃんと持っていた」という。「身振り手振りで　コミュニケーションを　とっていたのではなく　話していた」ということだ。この理論に賛成、反対の意見があるらしい。

◎ネットでそんなこんなを覗いてみた。たくさんある単語、その単語をどう並べるのか、それが言葉だ。「ピカソの絵」二つの単語の間に「の」が入っているだけだけれど、絵の話だ。チンパンジーの実験で、「バナナ」と「欲しい」という二つの単語をチンパンジーは覚えたが、「バナナが欲しい」という文にすることはできなかったそうだ。人間は、単語を並べること、文法を使うことによって、正確に意味が伝えられる。人間は、この能力は生まれつき脳の中にあるらしい。人は生まれたときから脳の中に、「基本的文法」を持っているらしい。

◎縄文人は言葉を持っていた、流暢に話していた、これが先生の結論だ。これはすごいことだ、石器時代人は、単語を並べるだけだろうと、オレはバカにしていたわけではないが、そうではなかった。人間の話す能力がいつの時代から出てきたのか、石器時代人が話していたとなると、これはもう感激である。

◎日本語は遠くの他の地域から入ってきたものではありません。「縄文ヤマト言葉」縄文時代からもうすでにあり、しかも１万年以上にわたって育まれたものです。縄文ヤマト言葉は次の万葉言葉につながっていきます。

◎日本語の中で注目すべきものがオノマトペ。擬音語・擬声語・擬態語のことです。

◎オノマトペ：この言葉は知らなかった。オノマトペ、好きだねえ、オレもよく使う。「は～は～　ひ～ひ～」これは、山に登る表現の時ですぞ。

◎擬音語：川がさらさら・・風がそよそよ・・。

◎擬声語：犬猫がわんわん・・にゃあにゃ・・。

◎擬態語：登山は、は～は～　ひ～ひ～・・。おまえを・・じいっと・・見つめる。ずど～ん、ばきゅ～ん。

◎縄文言葉が古事記・万葉集・風土記につながる・・。本居宣長も同じように言っていた、古代からの大和言葉、唐風なものでなく、日本古来の言葉で古事記は綴られている。ただ文字が無かった、文字は大陸からやってきた漢字を使った。自国の言葉を外国の文字で表現するという難しさ。

◎アイヌ語も、南西諸島の言葉も、本州の中も同じ縄文語です。

◎ま、先生の話はともかくとして、縄文人は、縄文ヤマト言葉でしゃべっていたのだ。単語を並べただけのゴリラ言葉や、記号を示して納得するというようなやり取りではなく、ちゃんと話していたのだ。いつ、どこで、だれが、何を、どうした、なんで・・てな調子で・・。

◎ちょっと聞きかじりの知識だけれど、単語が隅々まで行き届いている言葉、動詞が隅々まで行き届いている言葉、オノマトペが隅々まで行き届いている言葉、各国語に違いがあるそうだ。それを聞いて、何人かの外国語専門家、友人たちの顔が浮かんだ。もちろんこんなことは先刻ご承知の話だろうし、それらを駆使して、「えいやあ」とやっているはずと、まずはわけのわからない、文法があやふやな言葉で失礼。

◎「おめえ　これを食べてみろ　うまいぜ」「いやいや　これは　ちょっと焼いて　魚の汁と　山椒のはっぱ　をかけると　もっとうまいんだよ」「ならそれを　くれ　そのかわりに　これをやる」なんて団らん風景。

◎「あれは　オレのものだ」「なにを　おぬかし　あれは　私が先に　めぼしをつけていた」「なにを・・」「やるのか・・」「いてて・・やったなあ」なんて喧嘩風景、血を見るまで戦うか、そこそこでおさまるか・・。

◎ネアンデルタール人や石器時代のホモサピエンスがお互い話していたのか、これも興味がわくね。我々ホモサピエンスの遺伝子の中に、ネアンデルタール人のなごりがあるという。かつて、交雑をしていたという。集団での同居なのか、たまたま略奪やら紛れ込みやらで同居し始めたのか、想像するだけでもぞくぞくする。

028　縄文人 6　　240321

小林達雄著＜縄文の思考＞

◎捏造のことが書かれている。2000 年 11 月のある朝、驚天動地（きょうてん：世間を驚かせる、びっくり仰天に世間がつくのかな）の悪夢が訪れた。日本列島における 3 万年以前とみなされた遺跡のほとんどが、学問的根拠を失った。

◎旧石器捏造事件：アマチュアの考古学研究家、藤村新一が事前に埋設した石器を自らの手で掘り出した。

◎考古学会は、前・中期石器時代の幕開けとなり、各地の博物館は展示の中に組み込み、教科書に、国際会議にと世界に発信された。異論を唱える学者もいたようだが、声がかき消された。

◎筆者はもとより疑問の声に耳を傾けることなく、積極的に支持してきた。石器に対する初歩的かつ基本的な検討もおろそかになっていた。

◎3 万年以上前の日本列島には、北海道にはマンモス、日本列島にはナウマンゾウ、オオツノジカ、バイソンなどが入り込んでいた。

◎日本列島旧石器時代の最終段階で、びっくりする武器のことが書いてある。刺突用の槍やナイフだがその細工がすごい。棒や骨の槍やナイフ、その先端部分の軸に溝が彫られ、そこに 2.3 センチに細石刃がはめ込まれている。それまでは槍やナイフは単体の使い捨てだったが、細石刃は替え刃なので補充すればいい。細石刃文化は大陸にも広く分布する。特に北海道の遺跡は高い人口密度を擁していた。

◎細石刃は大陸側と文化圏を共有していた。北海道で出土の石が、シベリヤ原産と推定される。北海道産の黒曜石がウラジオストックで発見された。

◎人類文化の第一段階は、ゴリラと似たような生活様式だった。ゴリラは毎晩欠かさず寝るための巣をつくる。昨晩の巣がすぐそばにあったとしても見向きもしない。旧石器人も似たような生活ではないのか。新潟の A 遺跡に残された彫刻器が 600M 離れた B 遺跡で、彫刻器の剝片が出土した。

◎旧石器文化から新石器文化へは、農耕が始まる。新石器時代が農業を本質的な要素とする点からすれば、日本の縄文文化は本流から外れることになる。

◎先生は、土器の出現が、「とりわけ　土器の登場は　重要である」と吠え続ける。「土器が　出現するまでは　石器や　骨角器しかなかった　まったく違う大事件だ・・」

◎容器、器、皿・・これは便利だ。想像するに、大きな葉、木を削って皿や椀に、動物の内臓を使った水筒・・現代でも考えられる。

◎山が好き、キャンプが好きなオレがまず考えること。雨が、寒さが、虫が、獣が（危険は熊だけだが）・・。食料は自然の中から調達するスタイルの冒険家がいた、魚を釣り、小動物を狩り、焼いて食っていたが、オレは無理かな。オレは軟弱なので、プロパンガスとそれ用コンロ、アルミのコッフェルセット。ポシェットには、小型包丁、箸、フォーク、歯ブラシ・・。食料は街で売っている軽くて旨いもの・・。

◎キャンプの楽しみは、なんといっても飲食の時間、仲間との団欒の時間だ。まずは地面に、机代わりの台、椅子を用意する。コンロと鍋、コップと器、まずはお神酒で乾杯。ソロキャンプは淋しいね。

◎年代測定の方法で、数字の誤差がどんどん少なくなっている。1960 年、放射性炭素の方法が今はさらに改良されている。弥生時代の農耕が 500 年近くも遡り 2900 年前ころに始まった。青森県で出土した土器は 16000 年前のものと測定された、新技術により 3000 年も遡った。

◎世界をみても、縄文土器が抜きんでて古い。次に東アジアで 13000 年前　メソポタミアで 9000 年前。アマゾンで 7500 年前。

029　縄文人７　　280321

小林達雄著＜縄文の思考＞

◎縄文時代の模様、土器の形、土偶の形、これらは独特ですごいものだ、外国にこういう意匠や形態はないね。先生によれば、北海道も西南諸島（台湾までのことかな）も、縄文文化が行きわたっていたという。皆さんは、「日本のものは　何もかも　外来文化によるもの　外国のものが　日本に入ってきて　それが進化して　日本のものになった」と思っている、学者もそういう意見の人が多いらしい。縄文の、土器の形、土偶の形、これは独自のもの、日本列島に暮らした縄文人の独創品の数々だと言う。「すごいんだ」と先生は吠える。

◎「漆の木も　中国にしかなかった　中国伝来の漆器」というが、出土品は日本のものがずっと古い。「日本列島に　漆の木があり　技術があり　独創的に　使っていたのだ」と先生は吠える。

◎アイヌや沖縄の染織のデザインを考えると、縄文のデザインの流れを感じる。違うと言えば違うし、流れと言えば流れのような気もするが、さてさて。

◎沖縄の紅型：古代は“びんがた”の表記（紅型：漢字表記は昭和以降）。現代の紅型と呼ばれる染めは、洗練され、売らんかな精神に満ち満ち、「美しい　素晴らしい」は認めるが、オレが見たいものではない。昔のびんがた絵模様を見て、「縄文を感じるか」と問われると、しり込みをする、「縄文のデザインの流れを感じる」という意見は、いささか勇み足だったかも。ただ、激しい動き、大胆な色、力強さなどの点において、オレのまわりの模様類とは様子を異にしている。

◎アイヌ衣装：アイヌのデザインには感動した。アイヌ衣装、その色や形が古代からさほど変わっていないのではと想像している。「縄文との関係を　感じるか」と問われたら、感じると答える。ただ縄文の饒舌が失われ、縄文の部分ぶぶんが残っているという気がする。「それは仕方がないよね　時間が違うよ　時間の桁が違うよ」というぐらいに、Ｉ一万年という時間はすごい、ながい。

◎まず縄文の土器類がずらり並んだ写真を見ると、「物語があるんだ」「精霊がいるんだ」「なにものかが　飛び回って　いるんだ」こういう感覚がビシビシ伝わってくる。一つ閃いたが、縄文デザインにはためらいがない、説明がない、化粧がない。ガウディは素晴らしいけど、説明と化粧がある。民族学博物館に飾られたお面類、日本のもの、アフリカのもの、アジアのもの、南アメリカのもの、みんなそれぞれいいのだけれど、拙いね。そのてん、縄文のものは一万年の重みがある、あっけらかんとして説明も化粧もない。

◎先生は面白い提案をしている。竪穴式住居は地面を 50 センチ凸凹掘り下げ、天井は円錐に葉や草を葺き、その上から土をかけた形式のものだそうだ。真ん中の“いおり”を囲んで会話、夜は長い、火を燃やし、話を続けたはずだという。民俗学のどなたかも、“いおり”を囲んで、話を続けたはずだということを語っていた方がいた。話の内容は面白おかしい笑い話、性の話の次に、精霊・恐怖・霊魂・神話・・だという。

◎こういう先生の話を聞くに及んで、発掘作業、現場での発掘、一万年前の縄文人の息吹、「きゃつらは　ここで何をしていた　なにを考えていた・・」というところまで感性を引っ張ていかないことには、彼らの動きが読めない、感じられない。遺物はあるけれど、彼らが現実にここにいて、ここに座り、寝そべり、何を見つめていた、何を考えていた、何をしていた・・。考古学の中にも、社会学科があってもいい。オレも発掘現場は何度か見た、見たといっても、ただたんに見ただけだ。はいつくばって、土を手肌に触れたことはない。発掘現場というのは千年万年前のヒトのいた場所、どういう行動を、どういう会話を・・。

◎囲炉裏のそばで、ちろちろ燃え上がる炎を見つめる。炎はたえず形を変え色を変え暗闇の中に動き回る。オレも何度か山の中で焚火をしたことがある、炎はヒトを鎮め落ちつかせ、寄り添ってくれる。ただ見ているだけでも時間が経っていく。そんなときに、若いものや幼いものがいて、昔語りを、不思議な世界の話を、神の国の話を、病や死の話を、樹々や山々の話を・・。文化って、そんなところから出てくるのかな。